

来る7月10日から14日まで**第33**

**回国際農業機械展**、サブタイトル・次世代農業への新たな挑戦が帯広市・北愛国交流広場で開催されるだろう。だろう、というのは過去に口蹄疫、3・11東日本大震災の影響で8年ぶりの開催になるからで、愛する農水省以外は混沌とするこのご時世、いつ天変地異があってもおかしくないからだ。

会場には全道はもとより全国から、自分たちの世代では実現できない、**金髪・ブルーアイが考え出した農業と機械を理解したつもりでいる、身の程知らずのカントリー・ヒック**(ど田舎者)達が集まることになる。今から移動時間が1時間以内のホテルを探そうと考えても無駄で、ふあぐ(ほも) やストレートの男であつてもラブホ探しさえも無理であろう。

### 自衛隊ヘリで会場を盛り上げよう

覚えているだろうか？ 3年前に「自衛隊のヘリコプターを呼んで会場を盛り上げよう！」と書いた。

帯広には陸上自衛隊の対戦車ヘリコプターであるAH・1・コブラとOH・1ニンジャの攻撃部隊が会場の北西2マイルにある。そのヘリコプターで会场上空を航空法第91条第

1項(曲技飛行)に抵触しない程度の高機動の飛行をしていたらどうと、関係者である日本を代表する農業機械の工業会、事務局を通じて部隊に要望したが、全く相手にされなかった。

米国カリフォルニア州ツォリアアで毎年2月中旬に開催される農業祭では、初日9時の開幕と共に国歌斉唱があり、老若男女が風になびく高く掲げられた星条旗に尊敬と信頼を込める儀式が終了すると、北の空から海軍のF18スーパーホーネットが星条旗と同じ赤・青・白のスモークを出しながら会场上空で急上昇する。その様は、渡辺淳一が描いた官能の世界を超えたオツタチ状態に引き込まれるようで、**地域と農業**そして**国防が三位一体であり美しい**と感じる。まさしく国防と農業のコラボだ。自衛隊の銃口が開くことを望む日本人はそう多くはないが、その日が必ずやってくると備えておくのは農産物備蓄と同じである。

## 衆議院議員・中川郁子さんはお友達？

Vol.74



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに粟50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

残念ながら、どこの誰が付けたのかパイオニア精神なるものが全く存在しない

この北海道では、自衛隊嫌いが多くいる。まっ、戦後の真つ赤教育のたまものなのだろうとカントリー・ヒック達にほとんど気が付かせないあたり、日本文化をこの北の大地でも実証させ利益があるのは誰なのだろうか？などと前頭葉を使う朝日新聞本社内に支局を

# オレにも 言わせる!

## 北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

置いているニューヨーク・タイムスに任せておいても良いだろう。我われ生産者はずまらん政治のことなど考えずに、ひたすら働いて何ぼという世界に生きていることを忘れてはいけない。

話を戻そう。この第33国際農業機械展に自衛隊のヘリを呼ぼうという画策したが、本来は私の仕事でもなければ、私の利益には全く影響を及ぼすことはない。単純にこのお祭りを盛り上げようと考えただけだ。そして協力者はゼロだ。

百田直樹さんの永遠のゼロなら商売になるが、農家のゼロは足しても引いても、かけても割つても、後ろからやつても、前からやつてもゼロはゼロということは小学校高学年でも習っているはずなのに……。

そして海外のファーム・ショウを見に行く海外にかぶれたい勘違いカントリー・ヒック達は、ここでいったい何を学ぼうというのだろうか？

12月25日はクリスマス？ イエス・キリストが誰の子かも知らないくせにケーキ食べながらアーマンなんて言わないでワランタンメンでも食べていなさい。フランス語も話せずフォアグラとアンコウの肝の違いも気づかず、ボルドーのワインを飲んでテレビアーン？ サバ（フランス語のいいね）、サバ、このしめサバ

野郎が！ イタリア語も話せないのにパスタを食べてポーノ（おいしい）だった？ そんなあなたを役立たずの中折れ細麵のペペロンチーノ野郎と呼んで差し上げる。

たった2マイル先にある公共の自衛隊を、どうして利用しようと考えつかないのか不思議でならない。そんなことはパスタもピザも剣道も空手も、発明したのは我われだと勘違いしたい程度の委縮した終脳を持っているせいかもしれない、やはり朝日新聞本社内にある決して親日の教育を受けていない韓国を代表する東亜日報さんに任せるとしますか。

## 政治家の鶴の一声があれば

ところで皆さんライン<sup>※</sup>をやっていますか？ 私はタダで個人情報垂れ流すツイッターやフェイスブックには興味はないのだが、ラインは使っている。理由は簡単。スタンプを使えば意思疎通が可能なので、前頭葉の使用も減り、指のけんしょう炎の予防になる。

## 昨年の夏頃に中川郁子さんがラインの友達追加に登場してきた。彼女は北海道11区（十勝）の

選出の衆議院議員で2009年に急死した農水大臣、財務大臣などを歴任された中川昭一さんの妻である。当初はよくある友達の友達関係で

偶然やって来たのかな、くらいに思っていた。そのとき、ふと思い出したのが、とある元自衛隊幹部の「政治家を使えばヘリコプターの2機くらい簡単に飛ばすことはできますよ」という言葉だった。自衛隊は完璧な命令・縦社会であり、日本は一つ間違えればこの殺人集団にもなりうる組織を文民統制できる国家である。そこで国民を代表する防衛大臣や地区の政治家の鶴の一声があれば、「イエスサー・アイアイサー、よいやさのさー」となるのだそう。

どの政治家が適任なのかを考えた場合、彼女は自衛隊の集団自衛権にも理解があり、基本政策の3番目に「農林水産業の強化をかたち」と表明されているのだから「ヘリ2機飛ばして」とお願いしたら、「そんなの簡単よ♡」と言ってくれるかも、などと寝ぼけた朝夢を見ていたら、いつの間にか中川郁子さんがラインから消えてしまっていた。

でも彼女には期待したい。十勝のある高学歴の議員はビートを見て

「北海道でも立派なホウレンソウが取れるんだね」とか、航空界で有名な事件でJAS（日本エアシステム）の時代に酔っぱらって飛行機の中で漏らしてしまったとか……。

そういうえば5年前には言うことを聞くJAの組合長には、**若くて乳**

**が絞れない子牛でもいいから、最低6%以上個体数を増やすように指示した先生もいた。**その半年後は個体数の3%の乳牛を強制削減すると発表させたようで、半年で6%つまり1年で3%の計算になり、配下のJAのみ乳牛の個体数削減をさせなかったんだっけ？ 事実、日本農業新聞が毎月発表する支庁別の生乳出荷量で十勝だけは削減されない数字が何年間も並んでいた。

でも北見地方の反骨精神旺盛な酪農家は、一度淘汰されたら子牛から乳が出るまでに最低3年かかることと、罰金を支払うことを比較して、罰金を選んだ。彼の目論見は大正解で、1年も経たずに生乳削減はなくなり、彼をウハウハ状態にさせたい。農業の基本として、もし一度やめたら、数カ月単位の穀物危機は耐えられないだろうし、**再度復活させることに莫大な予算、人力、時間と知恵が必要になるのは明らかなことだ。**

では、誰が第33国際農業機械展を盛り上げるのか？ 仕方ない、このヒール・ミヤイが法律を守って飛ぶので、私のために上空を空けておいてください。決してバルーンやラジコン機などを飛ばさないように。では当日、**上から目線**でお会いしましょう♡

※1 ライン (LINE) : LINE (株)が提供するインスタントメッセージャー。スマートフォンや一般の携帯電話、PCで利用できる。多様なスタンプ機能、無料音声通話機能が好評